

# GDP 4期ぶりマイナス

**年1.2%減 第7波・値上げ響く**

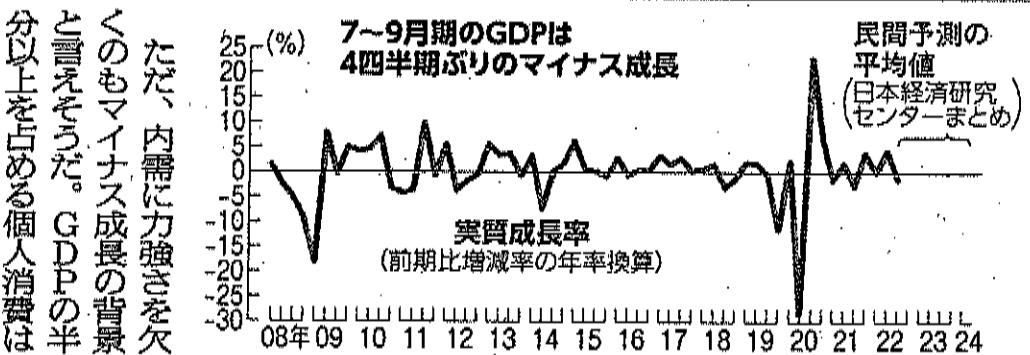
2022年7~9月期の国内総生産(GDP)は、物価変動をのぞいた実質で前期(22年4~6月期)比0・3%減、年率換算で1・2%減となつた。マイナス成長は4四半期ぶり。輸入の一時的な増加が主因だが、コロナ禍からの個人消費の回復が道半ばであることも響いた。

▼3面=電器店ため息

## 円安や資源高輸入増

事前の民間調査では、35人のエコノミスト全員がプラス成長を予測していたが、それを覆してマイナス成長に転じた主な要因は、輸入が前期比5・2%増と大きく伸びたことだ。円安や資源高の影響を受ける石炭や石油製品のほか、特殊要因としてウェブ関連など広告費の海外企業への支払いが増加した。こ

うした海外企業への対価の支払いは、サービスの輸入にあたる。内閣府は「決済時期のずれで、大口の支払いがあった」として、「一時的な増加とみる。一方、輸出は1・9%増。自動車や半導体製造装置などが増えた。中国で起きた都市封鎖(ロックダウン)による供給網の混乱からの回復があつたとみられる。



0・3%増にとどまり、1・2%増だった前期から伸びは鈍化した。3年ぶりに行動制限のない夏休みとなつたが、新型コロナウイルスの「第7波」が広がり、宿泊などのサービス消費は0・3%増と伸び悩んだ。さらに家電などの耐久財は3・5%減と2四半期ぶりのマイナスとなつた。値上がりしたスマートフォンなどが不振だった。  
10月以降はさらなる物価上昇が消費に影を落とす懸念がある。三菱UFJリサーチ&コンサルティングの小林真一郎氏は「海外経済の悪化による輸出減や家計の節約志向の強まりなど景気が下振れるリスクはあり、先行きは楽観できな

い」と話す。(北川謙二)

7~9月期